

# 飲酒文化概論～日本酒(清酒)を中心に～

春・秋連結学期

今出川校地開講科目

## 1. 目的・概要

the purpose and an outline

当科目は、「酒は人生を豊かにするツールである」という考え方の下で、飲酒に関する知識や日本酒を中心とした飲酒文化について学びを深めるプロジェクトです。春学期を通して飲酒と体質の関係性や一般人の飲酒意識などについて学び、秋学期を通して日本酒を中心とした飲酒文化の推進を図るための活動を行いました。日本酒は今や世界的に注目されている日本の文化となっています。しかし、座学や調査によって学びを深めていく中



で、国内での日本酒を取り巻く環境は決して明るい状況ではないということを知りました。弥生時代から神事祭礼や人々のコミュニケーションの手段として根付いてきた日本酒文化も徐々に衰退しつつあるのです。文化というものが国や国民を支える非常に重要なものであると知った我々は、この日本酒文化が盛り上がることに少しでも貢献するため、小冊子の制作とノンアルコール清酒スイーツの開発を行いました。この2つの活動を通して、普段日本酒に距離を置いている若者にも日本酒に興味を持ってもらい、気軽に且つ継続的に触れてもらいきっかけを作ることを目指しました。

### annual schedule

2014年	4月	アルコール体質遺伝子検査
	5月	日本酒の基礎知識学習 酒蔵見学
	6月	田植え体験 意識調査アンケート実施
	7月	アルコールパッチテスト・意識調査実施
	10月	稲刈り体験 目標・テーマ設定
	11月	企画立案 班分け
	12月	酒蔵や研究室への交渉 株式会社月桂冠 藤本様・日本酒サークル荒間様へのインタビュー
2015年	1月	小冊子完成 ノンアルコールスイーツ完成

## 2. 成果達成度

the achievement degree

文化を活性化させるためには、文化の次の担い手である若者が継続的に触れることが重要であると我々は考えました。そこからさらに細分化した時に、「若者」はお酒を飲める・飲めないにかかわらず全ての人を対象となり、「継続的に触れてもらう」ためには自発的な行動を促すきっかけが必要である、という考えに至ります。そしてこの課題をより効果的に解決するため我々は、「知識面」と「感覚面」の二方面からアプローチをしました。

### 【小冊子(日本酒ひと文化)制作】

「思わず広めたくなる日本酒情報が詰まった小冊子」というテーマのもとで、日本酒の文化面の知識や健康への効果、お猪口の豆知識など、複数の観点から「へえ〜」と思えるような知識を集め、冊子にまとめました。もともと日本酒に馴染みのない人であっても、この冊子を読むことで日本酒に興味を持ち、自発的な知識の探究や周囲への情報の拡散をしてもらうことを目指しました。

制作にあたって、「若者」がターゲットであるため、日本酒がどのように発展してきたのかという一見堅苦しい歴史に関するテーマを誰でも分かりやすく興味を持てるように記述したり、料理との関係などといった若者目線でのコンテンツを織り交ぜるなど、大学生に読みやすいように工夫しました。

### 【ノンアルコール清酒スイーツ開発】

「誰でも楽しめる日本酒の形を」というコンセプトの下でノンアルコールの清酒スイーツの開発を行いました。普段日本酒を飲まない人達にも、気軽に日本酒の風味がどういったものかを体感してもらうことを目的としています。また自らも作ってみようという自発的な行動を促すため、レシピは自宅にある材料で手軽に作成できるという点にこだわり、そのレシピを小冊子内に掲載しました。



開発するにあたって、特に「ノンアルコール」という点にこだわっていたのですが、はじめは一般的なアルコールの飛ばし方(煮切り)を用いていました。しかしこの方法では酒税法の定めるノンアルコール(アルコール度数1%未満)であるということを確実に証明できないと知り、精密な機械を用いて検出するため、まずは複数の大学に打診。ところが今回は、費用や時間的な問題で挫折せざるを得ない状況に。そこで最後は、「全体の重量からアルコールのグラム数を計算して1%未満に収める」という方法で証明を行いました。

### 3. プロジェクトを通じて

through a project

自分たちの認識不足や開講初年度のテーマで前例がなかったということ、「飲酒」というテーマを大学の講義で扱うということ、から多くの壁にぶつかり、断念せざるを得なくなった企画も複数ありました。その中で様々な気づきがありましたが、何よりも、企画というものが独りよがりな考えでは進行しないということを学ぶことが出来たと思います。

自分たちがしたいこと・機会を提供して下さる方々が我々に求めていること・目的達成のために本当にすべきこと、それらを明確化し摺り合わせ続けることで初めて企画というものが正しい方向に向かうのだということを感じました。少し考えれば当たり前のようなその視点が長期のプロジェクトにおいていかに欠落しやすいか、身をもって知ることが出来たことも貴重な経験です。

この学びに限らず、このプロジェクトで得た様々な気づきのすべてが、今後の人生において必ず生かすことのできるものだと思うので、常に意識し続けていきたいです。



#### 【編集後記】

自分たちがやってきたことを紆余曲折も含めて振り返ることが出来たのは、都度で得た気づきを自分に再度落とし込むうえで非常に役立ちました。プロジェクトで得た学びをこれからの人生に生かしていきたいです。

#### 【プロジェクトメンバー】

鈴木 里奈(文3) 平田 明日香(文3) 平山 真唯(文3) 多賀 裕菜(文4) 竹本 香代(文4) 橋爪 菜奈(社会3) 梅田 詩織(法3)  
岡本 多恵(法3) 岡本 雪乃(法3) 松崎 紗也香(法3) 松田 理紗(法3) 伊藤 佑樹(法4) 奥田 知美(法4) 大西 愛(商2)  
近藤 藍加(商2) 田中 美穂(商2) 増田 幸司(商4) 黒須 和輝(政策3) 齋藤 恭宏(SA)